

シェルボーン・ムーブメント (SDM) による指導法の 効果に関する保健体育教員免許取得希望学生の評価 —指導法としてのメリット・デメリットに関する評価を中心に—

Evaluation of the Effects of Teaching Methods by the Shelbourne
Developmental Movement (SDM) for Students Who Wish to Obtain a Health
and Physical Education Teacher's License: Focusing on Their Evaluation of
the Advantages and Disadvantages of the Method as a Method of Teaching

瀧澤 聡¹⁾ 田中 謙²⁾ 工藤 ゆかり³⁾
TAKIZAWA Satoshi TANAKA Ken KUDO Yukari

I. はじめに

我が国において、シェルボーン・ムーブメント (SDM) は、1992年に兵庫県神戸市にある公益財団法人ひょうご子どもと家庭福祉財団が、SDMを就学前の子どもたちを対象に療育として初めて実践開始した (日本シェルボーン・ムーブメント協会2013)。SDMの対象は、障害の有無によらず幼児から高齢者までと非常に幅広いが、このムーブメントがセラピーとして位置づけられているためか、国内外の先行研究では、障害のある幼児・児童を対象としたものが多い (小原・伊藤2004, 中島2012, 瀧澤 他2020, Bleszynski 2007, Zawadzka 他2012, Wieczorek・Kuriata 2014, Morgulec-Adamowicz 2020)。

一方で、セラピーとは異なる目的で大学生を対象としSDMを活用した報告もある。ヒル (2009) は、英国のBristol大学のソーシャル・

ワークのコースに所属する大学生がSDMの2時間のセッション内で「良い個性のグループを早急に確立する」ことを目的に、SDMのセッションを実施した結果、「積極的で良い人間関係をつくる機会」を得て、「グループの良い人間関係が達成」されたと述べた。また、ヒル (2009) は、英国のPlymouth大学教育学部に所属する大学生を対象に、小学校体育の教育課程の中にSDMが4週間のセッションとして設定され、これが「身体とムーブメントの可能性を理解する」という目的を果たすために機能したと述べた。Walter・Hen (2009) は、イスラエルのTel-Hai大学教育学部の学生を対象に期間を限定して彼らの教育課程の一部にSDMを組み込み、これと情動知能との関連について検討した。その結果、SDMの活動が学生たちの情動知能及び学習力の向上に寄与したと示した。

このように、SDMは人材養成を目的とし

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

2) 日本大学文理学部教育学科

3) 北翔大学教育文化学部教育学科

た大学の教育課程等に取り入れられ、大学生間における良好な人間関係の構築、体育教員の養成における教育課程への導入、大学生の情動知能の向上等の効果をあげている報告が散見される。しかし、我が国においては、上記のような報告がみあたらない。

そこで、本研究では、本学の保健体育教員をめざす大学生を対象にSDMを体験してもらい、自由記述によるアンケート調査を実施し、彼らが履修中の体育学的視点によるこのムーブメントの指導法の評価に関するメリットとデメリットについて検討することを目的とした。その意義として、SDMの適用が国外の研究報告のように大学生に可能かどうか明らかにできることや保健体育教員をめざしている大学生を対象にすることで、より専門的な視点によるSDMに関する知見が得られる可能性が考えられる。なお、本稿においては、メリットとデメリットの意味として、メリットは「利点・長所」、デメリットは「欠点・短所」とし、一般的に流通している意味を採用した。

Ⅱ. 方法

1. 対象

本学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科に所属する3年生の10名(男子5名, 女子5名)で、年齢の平均値と標準偏差は、 20.7 ± 0.4 であった。本研究は、履修科目「専門演習Ⅱ」の授業で実施し、1回90分で、実施期間は、2021年10月から2022年1月まで計6回であった。授業内容の概略は、表1に示した。

2. アンケート調査内容

調査のための質問票は、Microsoft Formsを用いて作成し、調査期間は、2022年1月13日から1月20日の8日間であった。調査内容は、質問1が「シェルボーン・ムーブメントを体験してみて、どのような指導法のメリットがあると考えますか。自由に書いてください」、質問2が「シェルボーン・ムーブメントを体験してみて、どのような指導法のデメリットがあると考えますか。自由に書いてください」と設定した。

3. 分析の方法

分析方法は、Mayring (2004) と伊東 (2004) の質的内容分析を参考とし、質問1における「メリット」と質問2における「デメリット」に関して記述した文章を抽出し、類似性に基づいて分類し、カテゴリー化を試みた。

4. 倫理的配慮

授業での実施であるので、全員に協力を求めた。その際、調査に協力してくれる人のみを研究対象とし、得られた結果は匿名にすること、本研究の研究者以外に一切の情報を漏らさないこと、協力できなくとも授業評価などに一切影響しないことを伝えた。

Ⅲ. 結果

1. SDMの指導法に関する評価から抽出したメリット

(1) カテゴリー、サブカテゴリー、記述

質問1から抽出したカテゴリー数は4、サブカテゴリー数は13に分けられた(表2)。

表 1. SDMセッション (第 1 回～第 6 回)

	第 1 回目	第 2 回目	第 3 回目	第 4 回目	第 5 回目	第 6 回目
導入	SDMセッションのガイダンス	前回の復習と本時の目的	前回の復習と本時の目的	前回の復習と本時の目的	前回の復習と本時の目的	前回の復習と本時の目的
展開	1. SDMの目的 2. SDMの概略 3. SDMの効果 4. 自己認識の活動目的 5. 実技 ・自己認識の活動 ・身体認識の活動 ・空間認識の活動	1. 他者認識の活動目的 2. 福祉施設での実践動 3. 実技 ・人間関係の活動 ・介助し合う活動の実際	1. 他者認識の活動目的 2. 通級指導教室での実践動画 3. 実技 ・人間関係の活動 ・介助する活動の実際	1. 他者認識の活動目的 2. 海外での実践動 3. 実技 ・人間関係の活動 ・対抗する活動の実際	1. 小集団の活動目的 2. 実技 ・小集団活動の実際	1. SDMの活動全般の復習 2. グループ編成 3. SDMのテーマごとで活動及び発表
まとめ	本時の振り返り	本時の振り返り	本時の振り返り	本時の振り返り	本時の振り返り	本時の振り返り

カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを [] で以下に示した. カテゴリーとサブカテゴリーは, 【コミュニケーション系】が, [人間関係の構築], [世代間交流], [他者認識の向上], 【心身系】が, [身体の制御], [心身のリラックス], [柔軟性の向上], [運動不足解消], [ゆるい運動], 【環境系】が [豊富な活動内容], [気軽さ], [道具不要], 【成功体験系】が [楽しさ], [称賛]であった.

(2) 【コミュニケーション系】

サブカテゴリー数は3であり, それらは [人間関係の構築], [世代間交流], [他者認識の向上]であった. [人間関係の構築]は, 「自然と周囲の人と仲良くなることができること」「人間関係を構築」「コミュニケーション能力を取得」「人間関係の繋がりが向上」「他者とコミュニケーションを取り人間関係の形成ができること」「仲良くなること」「男女間の仲が深められること」「他人から学ぶこと」であった. [世代間交流]は, 「世代を超えた交流」「年齢問わず, 一緒に楽しく身体を動かすことができること」「誰でも参加しやすいこと」

「たくさんの人と交流」「障がいの有無や年齢を問わず幅広い人々が対象となること」「世代での楽しみができること」であった. [他者認識の向上]は, 「相手のことを気遣う気持ちが生えやすい活動」「自分だけでなく他の人たちの考えを聞くこと」「互いに新たな発見」「人との関心が高まること」「人への信頼」であった.

(3) 【心身系】

サブカテゴリー数は5であり, それらは, [身体の制御], [心身のリラックス], [柔軟性の向上] [運動不足解消] [ゆるい運動]であった. [身体の制御]は, 「自分の体をコントロールする力」「体のコントロール力が身に付くこと」「身体の動かし方を学ぶこと」「全身を使いながら活動できること」「身体制御を獲得」「全身で動かすことで動きに対しての認識が高まること」「自分で考える力をつけること」であった. [心身のリラックス]は, 「リラックス効果」の記述が2, 「身体にくつろぎを感じる」「リラックス」「リラックス効果」「安心感を持つことができること」

表2. SDMの指導法のメリット

カテゴリー	サブカテゴリー	記述
コミュニケーション系	人間関係の構築	・自然と周囲の人と仲良くなることができること
		・人間関係を構築
		・コミュニケーション能力を取得
		・人間関係の繋がりが向上
		・他者とコミュニケーションを取り人間関係の形成ができること
		・仲良くなること
	世代間交流	・世代を超えた交流
		・年齢問わず、一緒に楽しく身体を動かすことができること
		・誰でも参加しやすいこと
		・たくさんの人と交流
		・障がいの有無や年齢を問わず幅広い人々が対象となること
		・世代での楽しみができること
他者認識の向上	・相手のことを気遣う気持ちが芽生えやすい活動	
	・自分だけでなく他の人たちの考えを聞くこと	
	・互いに新たな発見	
	・人との関心が高まること	
	・人への信頼	
心身系	身体の制御	・自分の体をコントロールする力
		・体のコントロール力が身に付くこと
		・身体の動かし方を学ぶこと
		・全身を使いながら活動できること
		・身体制御を獲得
		・全身で動かすことで動きに対しての認識が高まること
	心身のリラックス	・リラックス効果
		・身体にくつろぎを感じる
		・リラックス
		・リラックス効果
柔軟性の向上	・柔軟性が磨かれること	
運動不足解消	・性別や年齢問わず運動不足解消	
ゆるい運動	・息の上からない運動があること	
環境系	豊富な活動内容	・遊び方の規律がないことで、自由に楽しみ、想像力が大いに発揮できること
		・遊び方の種類が豊富
		・バリエーションが豊富
		・正解が複数あること
		・正解がないのでありのままに様々な表現が出来ること
	気軽さ	・誰でも取り組めること
		・気軽に行うこと
		・手軽に実施・参加
		・少人数でも大人数でも参加しやすいという点
		・スペースがあればすぐできること
道具不要	・ルールや道具を必要とせず安全に実施できること	
	・用具を使用しないため、けがのリスクが少ないこと	
	・道具を使わずに実施できること	
成功体験系	楽しさ	・楽しく学ぶことができること
		・運動能力が関係なく楽しく活動できること
	賞賛	・褒められるので気分が良くなること
		・肯定的声掛け

であった。[柔軟性の向上]は、「柔軟性が磨かれること」と「柔軟性も高まること」であった。[運動不足解消]は、「性別や年齢問わず運動不足解消」、[ゆるい運動]は、「息の上まらない運動があること」であった。

(4) 【環境系】

サブカテゴリー数は3であり、それらは、[豊富な活動内容]、[気軽さ]、[道具不要]であった。[豊富な活動内容]の記述は、「遊び方の規律がないことで、自由を楽しめ、想像力が大いに発揮できること」「遊び方の種類が豊富」「バリエーションが豊富」「正解が複数あること」「正解がないのでありのまま様々な表現が出来ること」であった。[気軽さ]は、「誰でも取り組めること」「気軽に行うこと」「手軽に実施・参加」「少人数でも大人数でも参加しやすいという点」「スペースがあればすぐできること」であった。[道具不要]は、「ルールや道具を必要とせず安全に実施できること」「用具を使用しないため、けがのリスクが少ないこと」「道具を使わずに実施できること」であった。

(5) 【成功体験系】

サブカテゴリー数は2であり、それらは[楽しさ]と[賞賛]であった。[楽しさ]の記述は、「楽しく学ぶことができること」と「運動能力が関係なく楽しく活動できること」であった。[賞賛]の記述は、「褒められるので気分が良くなること」と「肯定的声掛け」であった。

2. SDMの指導法に関する評価から抽出したデメリット

(1) カテゴリー、サブカテゴリー、記述

質問2から抽出したカテゴリー数は3、サブカテゴリー数は5に分けられた(表3)。カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを[]で以下に示した。カテゴリーとサブカテゴリーは、【コミュニケーション系】が、[異性間接触の制限]と[成人間の活動困難]であり、【心身系】が、[子どもの特性に伴う負荷]、[関心の持続困難]、[思考停止]であった。

(2) 【コミュニケーション系】

サブカテゴリー数は2であり、[異性間接触の制限]の記述は、「異性同士だと出来る範囲が限られること」「日本の文化的にも男女間での交流がしにくいこと」「男女が一緒に活動できないこと」「男女に羞恥心が生まれ思うように身体を動かすことができなくなること」「年齢や活動による触れる部位によっては男女間で行えないこと」、[成人間の活動困難]の記述は、「大人同士は取り組み辛いこと」「体格が大きい人と一緒に行くことは難しいこと」「関係性が薄いと互いに遠慮が出てしまいそうで、内容によって用途がつかみにくくなること」であった。

(3) 【心身系】

サブカテゴリー数は3であり、[子どもの特性に伴う負荷]の記述は、「コミュニケーションが苦手な子や複数で一緒に活動するのが苦手な子にとっては苦痛に感じること」「人見知りの子や引っ込み思案の子には負担になる可能性」「障害によっては身体的特徴が現れ出来ないこともあること」「発達障がいのある子ども達が行うと触られることへの抵抗」「思考が苦手な子どもにとっては提示されたことに対する方法を考えることが大変なこと」

表3. SDMの指導法のデメリット

カテゴリー	サブカテゴリー	記述
コミュニケーション系	異性間接触の制限	・身体接触があるため男女間での活動に制限がかかること
		・異性同士だと出来る範囲に限られること
		・日本の文化的にも、男女間での交流がしにくいこと
		・男女が一緒に活動できないこと
		・男女に羞恥心が生まれ思うように身体を動かすことができないこと
	・年齢や活動による触れる部位によっては男女間で行えないこと	
	成人間の活動困難	・大人同士は取り組み辛いこと
		・体格が大きい人と一緒に行くことは難しいこと
		・関係性が薄いと互いに遠慮が出てしまいそうで、内容によって用途がつかみにくくなること
心身系	子どもの特性に伴う負荷	・コミュニケーションが苦手な子や複数で一緒に活動するのが苦手な子にとっては苦痛に感じる
		・人見知りの子や引っ込み思案の子には負担になる可能性
		・障害によっては身体的特徴が現れ出来ないこともある
		・発達障がいのある子ども達が行うと触られることへの抵抗
	・思考が苦手な子どもには提示されたことに対する方法を考えることが大変なこと	
	関心の持続困難	・ひとつの運動に飽きてしまい最後まで行なってもらえないということ
	思考停止	・考えが浮かばない時に周りの人の真似をしがちになることが多々あったこと

であった。[関心の持続困難]の記述は「ひとつの運動に飽きてしまい最後まで行なってもらえないということ」、[思考停止]の記述は「考えが浮かばない時に周りの人の真似をしがちになることが多々あったこと」であった。

IV. 考察

1. 学生が認識したSDMの指導法のメリット

表2にあるように、学生たちが認識したSDMの指導法のメリットについて、カテゴリー内で最も多かった記述数は、【コミュニケーション系】、次に【心身系】、【環境系】、そして【成功体験系】であった。これらのうち上位2つのサブカテゴリーは、[人間関係の構築]、[世代間交流]、[他者認識の向上] [身体

の制御]、[心身のリラックス]、[柔軟性の向上] [運動不足解消] [ゆるい運動] であった。シェルボーン(2010)は、「すべての子どもたちは、子どもたち自身の身体にくつろぎを感じることによって身体統御を獲得していくこと、そして子どもたちは人間関係を構築していかなければならないこと」と述べ、子どもの成長に必要なニーズを「身体をリラックスさせながら身体統御の獲得」と「人間関係の構築」の2点をあげた。また、シェルボーンの弟子の一人であるJanet Sparkesは、「シェルボーンのエッセンス入門第2版」の「第2版への序文」において、上記の2点が「シェルボーンのエッセンス療法の取り組みの真髄」と位置づけ、SDMの理解にはこれら2点を中核にする必要性を主張した(シェルボーン2010)。したがって、学生たちが認識したSDMの指導法のメリットの中に

上記2点の知見が包含されており、学生たちはSDMの活動等の経験を通して、SDMの中核の概念の理解を深化させたと考えられる。

表2のカテゴリーのうち、下位2つは【環境系】と【成功体験系】であった。【環境系】のサブカテゴリーは[豊富な活動内容]、[気軽さ]、[道具不要]、【成功体験系】のサブカテゴリーは[楽しさ]と[賞賛]であった。SDMの特色として、瀧澤(2016)は、「特別な道具が必要ないこと」「実践するための特定の技術的また身体的スキルを必要としないこと」「実践のためのパートナーを柔軟に組み合わせられること」などをあげている。また、シェルボーン(2010)においても、SDMの活動自体に「楽しさ」を感じることや活動について褒められることが重要であることを示した。学生たちが認識した下位2つの【環境系】と【成功体験系】が、SDMの指導法のメリットとしてあげられていたので、SDMの特色やその重要点が、反映されている結果であったことが考えられる。

2. 学生が認識したSDMの指導法のデメリット

表3にあるように、学生たちが認識したSDMの指導法のデメリットについて、カテゴリー内で最も多かった記述数は、【コミュニケーション系】、次に【心身系】であった。これらのうち【コミュニケーション系】のサブカテゴリーは、多い順に[異性間接触の制限]と[成人間の活動困難]、【心身系】のサブカテゴリーは、[子どもの特性に伴う負荷]が最も多く、[関心の持続困難]と[思考停止]は同数であった。

シェルボーン(2010)は、SDMの実践にあたり、安全面の配慮を繰り返し言及してい

るが、他の観点による指導法のデメリットは見当たらない。一方で彼女の弟子の一人であるヒル(2009)は、SDMの指導実践におけるデメリットについて、いくつか言及している。具体的には、「身体接触」を含む活動の実践の場合、参加者に対して事前にSDMの理論や効果について説明し許可を取る必要性があることや、SDMの活動において参加者を持ち上げる等の方法を導入する場合には、事前に参加者の状態を確認する必要性があること、また、SDMの実践に参加できない特定の人々に対する支援の困難性についてもあげている(ヒル2009)。

このようにSDMの指導法のデメリットについて、学生たちが認識したことと英国で実践されてきた経験にもとづくことの間には、「身体接触」が共通のデメリットとして認められた。学生たちは、SDMの活動が、ある年齢以上の異性間では限界があると認識しており、シェルボーン(2010)とヒル(2009)による文献には、SDMの指導実践における異性間や年齢のデメリットに関する言及がない。学生たちは、「身体接触」に関して繊細に反応したと考えられ、日本におけるSDMの指導実践には、参加者によっては留意しなければならない点が示唆された。

次に、サブカテゴリー[成人間の活動困難][子どもの特性に伴う負荷][関心の持続困難]と[思考停止]に関しては、参加者の特性によるSDMの指導実践の難しさを示していると思われる。しかし、SDMの指導実践の経験を積み上げることで、参加者の特性の理解も進み、SDMが提供できる内容や方法を構想できるようになるとシェルボーンは述べている(シェルボーン2010)。したがって、学

生たちのSDMの活動の経験値が上昇すれば、自ずと上記のデメリットは解消されていくであろう。

V. まとめと研究の限界

本研究では、保健体育教員をめざす大学生を対象にSDMを体験してもらい、自由記述によるアンケート調査を実施し、彼らが履修中の体育学的視点によるこのムーブメントの指導法の効果に関する評価のメリットとデメリットについて検討した。その結果から、シェルボーンは子どもの成長に必要なニーズとSDMの特色やその重要点を示したが、学生たちは、それらをメリットとして理解し深化させたことが示唆された。また、SDMの活動におけるデメリットとして、「身体接触」があげられ、我が国において異性間や年齢に留意する必要性があることや、障害のある子どもの特性によるSDMの実践の難しさが示された。

このように教員免許取得希望学生がSDMを体験し、その指導法の効果を評価することで、そのメリットとデメリットをある程度明らかにできたと思われる。そして、SDMの重要点などをメリットとして認識可能であったことは、本研究の指導法に効果があったと窺える。一方で、SDMの指導法のデメリットとして、障害のある子ども等の特性によるSDMの実践の難しさが示されたことは、本研究におけるSDMの指導法が、参加者の特性に応じて実践されるということ、十分に伝えられなかったことが考えられ、今後大学生を対象にSDMを指導する場合の改善点として検討する必要があると示された。

本研究の限界は、研究対象者数が10名であり少数であったので、今後はさらに対象者数を増やすことや、大学生を対象としたSDMの指導法について、このムーブメントの本質が伝えられるようなプログラム内容の再検討が必要になるであろう。

文 献

- 日本シェルボーン・ムーブメント協会 (2013)
HP <http://j-sherborne.org> (参照2022-12-1).
- 小原英輔, 伊藤美智子 (2004) 「重度知的障害者に対するシェルボーン・ムーブメントの実践報告」日本体育学会大会号 (55), 521.
- 中島良太 (2012) 「シェルボーン・ムーブメントにおける知的障害児とのコミュニケーションに関する事例的研究」上越教育大学大学院特別支援教育コース修士論文題目一覧平成23年度修了生HP, <http://www.juen.ac.jp/handi/linkfiles/syuronyoushi/PDF/PDFh23.pdf> (参照2022-12-24).
- 瀧澤聡, 阿部達彦, 石川大, 磯貝隆之, 松井由紀夫, 田中謙 (2020) 「重症心身障害児を対象にしたシェルボーン・ムーブメントによるリラククス反応を引き出すためのセッション作成とその評価」北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要 (11), 65-76.
- Bleszynski, J (2007) Research study 1: Effectiveness of Sherborne Developmental Movement for children on the autistic spectrum. In E. Marsden & J. Egerton (Eds.), *Moving with research: Evidence-based practice in Sherborne Developmental Movement* (pp.127-130). Sunfield Publications.

- Zawadzka, D., Zawadzka, P., Bugaj, R., Curyło, M., Gumułka, A., & Bukowska, A (2012) Evaluation of effectiveness of the therapeutic program combining elements of occupational therapy and Veronica Sherborne's Developmental Movement approach in autistic children. A preliminary study. *Fizjoterapia Polska*, 12 (4), 405 – 416. doi: 10.5604/16420136.1036673.
- Wieczorek, M., & Kuriata, B (2014) Sherborne Developmental Movement Method as a form of support for therapy in children with autism spectrum disorders. *Journal of Education, Health and Sport*, 4, 95–103. doi:10.5281/zenodo.13247.
- Morgulec-Adamowicz, N (2020) The Sherborne Developmental Movement (SDM) for Individuals with Autism Spectrum Disorder. *Palaestra*. Vol.34 Issue 2, p17–22.
- シンディ・ヒル (2009) 「コミュニケーションのためのムーブメントーシェルボーンの発達のためのムーブメントの展開ー」 訳：関口美佐子, 平井真由美, 衣本真理子, 瀧澤聡, 三輪書店
- Walter, O & Hen, M (2009) 「Movement and Emotions in Higher Education」 *International Journal of Learning*, Vol.16 Issue 8. p101–115.
- Mayring, P (2004) *Qualitative Content Analysis*. Uwe Flick, Ernst von Kardoff, Ines Steinke. A companion to qualitative research, 266–269.
- 伊藤隆子 (2004) 「在宅療養移行期のケアマネジメントにかかわる在宅介護支援センター所属の看護職ケアマネジャーの認識」 *千葉看護学会会誌*. 10 (2). 56–64.
- ベロニカ・シェルボーン (2010) 「シェルボーンのムーブメント入門ー発達のための新しい療育指導法」 訳：関口美佐子, 平井真由美, 衣本真理子, 三輪書店.
- 瀧澤聡 (2016) 「特別支援教育の「自立活動」にシェルボーン・ムーブメントを導入するための予備的検討」 *北翔大学教育文化学部研究紀要* 1, 179–188.

